皇城の御新營落成せるより御遷宮ありしが、其次第を記さんに、先づ宮内省及宮中第一に移り、次で御神壇を奉送し、それより騎兵の護衛を以て三種の神器卽ち寶劔、寶鏡、寶璽を移し給ひ之を以て終りたり。

偖新皇居の御準備すべて完結せしを以て一月十一日　皇帝皇后兩陛下は宮人一同を具し嚴肅なる行列を以て御遷宮あらせらる。此日天氣晴朗にして　皇帝陛下は皇后陛下と鳳輦に召させられ、騎兵は前後に護衛し奉り、肅々として徐ろに進ませ給ひ、整列せる學生、近衛兵等の間を通過せられて、御堀に架せる二重橋を渡らせ給ひぬ其光景の見事なる實に繪畫を見るが如し。

宮殿は高き處にありて外觀は全然日本風にして著御後　兩陛下には謁見室にて謁見を賜はりしが外國人にして之に與れるは余一人なり。

此宮殿も總て他の宮殿と等しく二部分に分れ、内部は嚴に古來の習慣に從ひて日本風に建て外部は公の接待の爲め歐洲的に建築せらる。

廣大なる宮城は華麗を盡し、便宜を謀りて二階造に建て、宮内省の建物は全く之と分離せり。新築の宮内省は數層の西洋屋にして宮殿とは少しく離れ、城外より特別なる入口を有す。歐洲風の官廳を建設せるため宮内省員は皇室に親近し若くは御近侍の者と同居歡談するの便宜なきに至れり。さりとて西洋風の家屋が室の分劃上前に劣れりと言ふにはあらざるなり。

余は今窓外を望みて若し此處が伯林のウイルヘルム市街ならんにはと思ひしが、猶舊城の小庭を控へたる日本流の我事務室を眺めては一種名殘惜しき心地せられたり。

憲法發布式の次第書

余等は熱心に新皇居の拜觀を始め、且近々に行はる可き憲法發布式及第一帝國議會開院式に付きての計畫をなせり。

開院式は議事堂内に於て行はるべきか、將又新宮内に於てすべきかの二見解生じ、余は憲法發布式及開院式の假議事堂内なぞに行はれずして宮中に於て執行せらるべしとの說に左擔せしが、此說は遂に容るゝ所となりしを以て、余に宮中の次第書の起草を仰付けられたり。憲法發布式の次第書は昨年中屢々伯林に行はれたる之に類似の儀式を模範として起草し省議の後宮内省より出せる草按は　陛下の御裁可を得たり。

此祝典は二月十一日の紀元節卽ち神武天皇御卽位ありて皇室の基礎を立てられたる日を以て擧行することゝなり其詳細なる條項に關しては爾來數回の協議會を宮内省に開けり。

本事件の進行中外國新聞通信認可、宮城皇旗揭揚侍從武官任命、及び伊藤、黑田兩大臣に授與されたる新設バウニア勳章佩用允許等の諸問題決定されたり。

此間余等の一驚を喫せしこと起りたり。そはわが全家族の乗れる馬車、突然逸走せる事にして、家族には異狀なかりしも憐むべき馭者は之が爲めに兩手に負傷するに至れり。由來歐風の馬車の馭者臺は餘り高きに過ぎて日本の馭者には身長の異なるより自然不適當にして、少しく烈しき衝突あるときは忽ち其平均を失し爲に屢々馭者臺より落下することあるなり。

ウイルヘルム二世皇帝の御誕辰祭

獨逸皇帝普魯亞王ウイルヘルム二世陛下の第一回御誕辰祭は一月二十七日日本在留の獨人間に祝賀せられたり。同日朝教會に集合しスピンネル牧師の祈禱に參列し、午横濱に赴き獨逸倶樂部の聖餐會に臨みしが、集會せる同國人無慮百二十名の多きに達せり。獨逸代理公使デルンベルヒ男は達辯を以て獨逸國民がホーヘンツヲルレン皇室に忠誠なるべきことを說き、喝采聲裡に其演說を終りたり。

墺國皇太子ルードルフ殿下の薨去

一月三十一日余等は土方宮内大臣の午餐會に列席せしに墺國皇太子ルードルフ殿下の訃音に接し一同大に恐懼せり。

偖斯の如き場合に歐洲諸朝廷は日本皇室に對して相互の禮を盡すの方針なるや、未だ分明ならざるにも關らず、宮中喪及弔喪發布のことは卽夜決定せられたり（其後歐洲朝廷の内にて應禮せざる處ありたり）こゝに於て日本政府は新に又耶蘇教國王室の禮を採用するに吝ならざりしなり。然るに前の疑問は數年の後實際に決定され千八百九十七年一月十一日　皇太后陛下の崩御に際し歐洲諸朝廷の多くは宮中喪を發せざりき。

千八百八十九年（明治廿二年）二月十一日憲法發布

憲法發布の準備の爲十一日までは之に關係ある諸官廳は非常なる多忙を極めたり。

天氣寒冷にして降雨の模樣ありしが、十一日の朝に至りて降り出したり。されば數百の參内者は皆馬車或は車を驅るが故に、斯樣の事に經驗少き警察官に取りては實に非常なる勤勞なり、余等は大禮服を著して午前九時十五分宮中に參内せしが馬車の往復は一方ならざる雜踏なり。

祝典の第一次は禁苑中なる御神殿に於ける神宮の祭祀なり。　皇帝陛下には例の如く扈從者と共に白絹の御裝束を召させられて出御し給ひ、憲法制定の御誓約を遊ばされ、憲法政治の上に御祖先の冥助を垂れ給はん事を祈らせらる、之を終りたる後　陛下には西洋服を召させ給ひ、特に此御儀式の爲に準備せられたる莊嚴なる正殿に出御遊ばさる。是より先　皇后陛下、各宮妃殿下は玉座の右側に各宮殿下は左側に御着座相成り外交團體の人々は宮殿下に次ぎて同じく左側に着席せ

り。

皇帝陛下には玉座に立たせ給ひ、玉音朗に憲法發布の宣告文を御朗讀あらせられ、滿場深き感にうたれて皆肅然たり　皇帝陛下の御前には最高官及び貴族名士等の恐らく貴衆兩院を組織すべき人々肅然として正立せり。見上げ奉るに　皇后陛下には玉座の右側少しく高やかなる御座にあり、各妃殿下及び女官等之に隨伴し、　皇后陛下には燦爛たる御冠と薔薇色の御洋服を召させられ、勳章をも佩ばせられ、又御隨伴の各妃殿下も婦人勳章を着けさせられたり、斯く貴婦人の並び居玉ふ樣の美しさ何と云はん方なし。

官内官は皆玉座の後方壁際に立並び、外交官は大禮服を着し端然として並列せしが各國の異彩を放ちて一段の光景を加へたり。

皇帝陛下は大元帥の御軍服を召させられ、御胸には赫灼たる日本の勳章を佩ばせられたり。無數の參列者は水を打ちたる如く肅然として勅語を拜聽せしが、やがて正殿と硝子戸唯一を隔てたる御内園より「君が代」の國歌は嚠喨として響き、横濱及東京に碇泊せる日本軍艦の祝砲は東京砲兵隊の百一發の祝砲と相和して恰も百雷の一時に落つるが如くなりき。

斯く莊嚴なる御式の間に　皇帝陛下は徐々御入御相成り午後一時よりは大觀兵式の擧行さるべき御定めなり。

群臣の漸次正殿より退去せる時、文部大臣森子爵が其朝此御盛式に參列の爲め大禮服を着し將に參内せんとするに當り迷信せる神官（原書の儘）の爲め暗殺せられたりとの怪報傳れり。

當時文相警衞の任に當れる警官は忽ち劔を揮ひて暗殺者の首を斬り落せしが、此無造作なる制裁は此兇行の原因を探知すべき便宜を奪ひ去れり。されど先づその暗殺の原因として日本人間に傳へらるゝ所によれば、森文相は米國の教育を受けたる人にして、伊勢に參宮せる際神聖なる場所に靴を以て踏み入り杖を以て御簾を上げたることありて之が爲伊勢神宮の神官を狂怒せしめたるなりと。

此說は後日三重縣知事より取消されたれども、全國一般に此說を信ずるもの丶如し。又一說によれば帝國大學の授業料を引上げたる爲、一學生は勉學を續くる能はざるの境遇となり、これ全く森文相の爲めなりとかく文相を暗殺せるものなりと。

此二說の何れが事實なりや余の遂に確むる能はざる所なりと雖も、暗殺せられたる事實は邸を相接したる余に取りては極めて深き感慨を起せり。此兇行は此祝賀に慘憺たる片影を投せしと雖も、不幸なる隣人森子は此日尙餘命を保ち而も憲法發布の大典は滯なく進涉せり。

皇帝皇后兩陛下には正一時觀兵式場に著御相成りしが此際始めて六頭立の鳳輦に召させられ先驅も皆新しき制服を裝へり。

天氣は朗かなりしかども式場は泥濘甚だしく此二月十一日の一日に數千圓の禮服は泥土に委せら

れしならん。

各軍隊（海軍の陸戰隊初めて交り居れり）は地形の不良なるにも關らず、整伍堂々として進行し、見事に此式を終れり。未だ宮中にては七時より饗宴を賜るべしとの事なりしを以て、午後暫く休憩の暇を得たり。偖宮中の本御食堂には百二十人着席し　兩陛下には茲に臨御遊ばされ、餘他の二百八十人は之を四室に分たれ各室には宮殿下、　兩陛下の御名代として御臨席相成饗宴に先ちて宮殿下は會衆に向ひて　皇帝陛下には四百人を一堂に集めざることを御遺憾に御思召され、此食卓を以て陛下の御食卓の末に連續せるものと思ふべしとの篤き思召を傳へられたり。斯の如く純乎たる日本流の優渥なる御挨拶を賜はりしかば會衆は只深く御仁德に感ずるの外何の思ひもあらざりき。

特に記する迄もなく此四百人の食膳を歐洲風にて十分に能く調理せんことは宮内省管理者殊に大膳部長のデウエッテ氏に取りて實に大なる勞劬なりしが、然も批評眼を有する外交官の判斷によるも、此饗宴は頗る好結果なりしと、饗宴の終りたる後一同宮城の音樂堂に入り、　兩陛下には一同を御前に召され、御機嫌うるはしく御物語ありて　皇帝陛下にはあなたこなたに玉歩を移され、皇后陛下は靜に椅子に御着坐あらせられたり。九時頃より正殿にて伶人の古風なる極めて興味ある演奏始まれり、　兩陛下には特に設けられたる一段高き御座所に出現し給ひしが、此時　皇后陛下には燦爛たる花冠を召され、又白色、金色の洋裝を着せられ　皇帝陛下もろとも外交官に向ひて御一禮の後著御あらせらる。

玉座の正面、窓の方面には稍低き舞臺を設け、此處には華麗なる服裝を爲し古代の奏樂に連れて古代の舞樂を舞ひしが、陪觀者は皆演舞に特種の感想を與へられ、嘗て斯の如き幽玄を感じたる事無しと賞讃し合へり。余は嘗て宮中の舞踏音樂の爲め伶人雅樂部の保存を賛成したることありしが、今斯く見事に其用をなせしを見、心私かに喜びに堪えざりき。特に吾人の趣味を感じたるは舞樂にして、之に要する衣裳、劔等は京都より取寄せられたりと。

數番の興深き舞樂の後一同喜びを堪えて退出せり。唯此間窓の明け放たれたるため盛裝せる貴婦人の寒冷に困じたると、燭臺に「ホヤ」なかりし爲大禮服の上に蠟などしたゝりしは殘り惜しき心地したれど、そは云ふべき程に非ず。猶御食堂の食器棚及接近せる廣間、展監室等開かれ居りしが、中にも日本間の御座敷の煌々たる燈燭に照され金物（かなもの）のひらめく天井、光澤ある黑塗の戸障子等は實に見事なる觀を呈せり。多數の人は歡談尚盡きず止まりて所々拜觀せしが、其中にて普魯亞の軍服を著けたるフヲン、ウイルデンブルッフ及イルグネル氏等に逢へり。

森文部大臣は翌十二日午前五時逝去せられ、昨日は憲法發布の盛典に喜びしが、今日は憂鬱なる弔禮を述ぶる事となりたり。森氏の葬式は數日後に盛に執行せられ　皇帝陛下より其費用を下賜せられたり（原書の儘）當日は自邸より出棺し、多數の神官は皆白絹の祭服を著け黑烏帽子を載き

て柩に從ひ、敕使各國務大臣官僚等之に參列し祭儀すべて日本古風を守りたり。

憲法發布の盛典は此哀悼の爲め中止せらるゝが如き事なく一般國民も此盛典に與らんことを欲し

皇帝皇后兩陛下の東京市中を巡幸ありて上野公園に行幸あらんことを請へり。御通輦の道筋には數限りなき綠門を建て御道筋の兩側には人民雲霞の如く集ひたり　陛下には人民の請ひを容れ給ひて　兩陛下御同輦にて忠實なる庶民に親臨し終へり。抑　皇帝陛下皇后陛下が鳳輦を同ふせられ、且庶民に拜觀を許さるゝことは御習慣になき事なるに今斯く皇室の御風習に一新紀元を來したるは注目すべき事なるべし。

此新生面を開ける國家大典の紀念として紀章を制定し給ひ、之に與りたるものへ御下賜相成りたり。同夜總理大臣黑田伯は大夜會を催したり。此夜會は森文相の變化の爲め中止せられんとせしが、政治的の大意味を有する宴會なるを以て余の忠告により開催せられたるなり。

次日余は土方宮內大臣に招かれ、憲法發布大祝典に關して種々談話し、且今回生じたる小瑕瑾は之に鑑みて未來を戒むべきことを語り合へり。

宮內省は二月下旬まではケーニヒスベルヒの卽位式の調査に忙はしかりしが、是れ日本皇室に於て將來斯の如き場合に於て其模範とすべき典式を研究したるなり。

有栖川威仁親王殿下の歐洲御漫遊

二月十六日有栖川威仁親王殿下は新に制定せる婦人勳章を露國皇后陛下に進呈する爲、特別の使命を帶びてセント、ペテルスブルヒへ向け御出發相成りたり。露國公使シエーウイツチ氏は宮內大臣に露國最高アンネン勳章を贈與せんことを斡旋せり。既に記せるが如く日本人は獨國の勳章を得んことを欲して故第一世ウイルヘルム陛下に拜謁するもの多しと、されば今露國政府も勳章を贈るに吝ならざるべし。

有栖川宮殿下は露國皇室の外伯林、ワイマール和蘭、白耳義、墺地利、伊太利、英吉利等の各宮室をも訪問せられ、又巴里にも久しく御滯在相成る可き御豫定なり。殿下は海軍將校の職に在らせるゝを以て歐洲各國の宮室を訪問せらるゝの外、その軍港艦隊等にも注目すべき使命を帶びさせられたり。

當時日本ワイマール朝廷との間には特に親密なる關係存在し、カールアレキサンデル大公爵は菊花勳章を有し、獨逸駐劄日本公使は常にワイマールに於て尤も信認せられ各宮殿下及政治家の同地に至るや又特殊の鄭重なる待遇を以て迎へられ、日本にても亦曾てワイマールの御血統に尊敬を表するを等閑にせしことあらざるなり。されば此間に於ける日獨間の關係は誠に親密なるものなり。

此頃所々に宴會屢々催せられしが、殊に小松宮殿下は歐洲より歸朝せられし當時なりしかば、屢々延遼館に於て饗應を催せられ且舞踏會をも開かれたり。

歐洲風を好まるゝ小松宮家は三宮氏夫妻の輔佐によりて益々近世社交的の方針を取らせられ、兼て皇室に西洋の風習を入るゝの源泉となれり。小松宮殿下同妃殿下は歐洲風を盛ならしむるの目的を以て御邸内に舞踏會を催ふして　皇帝皇后兩陛下の臨御を請ひ、且又他の招待者は日本人に限りたり　皇帝陛下には舞踏を御覽せられて御機嫌殊にうるはしく、余が偶然に漏れ承る處によれば　陛下には其後内庭にて「舞踏は曲馬の樣にて面白かりし」とか御意遊ばされしと。

その冬、　皇后陛下には女官と共に禁苑内に於て御乘馬を始めさせられしが、此御運動には頗る御滿足の御模樣なりし由、　陛下御乘馬の際は全然西洋風の乘馬衣を召され、高帽（シルクハット）若くは毛皮帽を御用ひ相成りしとの事なるが宮中の者の外誰も拜觀せる者なかりき。

獨逸公使ホルレーベン氏著京の期近づけるを以て、代理公使たりしデルンベルヒ男爵は歸國する事となり同男爵の送別會は獨逸人間に度々催されたり。

ホルレーベン公使は三月一日を以て着京し、同時に新任墺地利公使ビーゲレーベン氏も亦入京せり、ビーゲレーベン氏は現今カイローに在りて余は今尚交誼を有す、又サビエハ公は墺國公使館附武官として氏と共に來朝せられたり。

宮内省の外國顧問官廢止

余等の任期完了せる以後宮内省は再び外國顧問官を置かず、現今の三宮男爵は式部次官として之が任に當り、後式部長となりて巧に宮廷内の外交に關する事を處理し、其夫人（英國人）又能く夫の事務を補助す。余はセントペテルスブルヒより携へ歸れる路易十六世式の客間裝飾品を所有せしが、出發前皇室の御買上になりたり。余が送別會は頻々と催せられしが、その中殊に記憶すべきは三月六日式部職員の發起にて紅葉館に開かれし送別會にて、此會には一同日本服にて參會され、極めて莊嚴なる座敷にて實に巧なる踊を催されたり。此座敷には金屏風を立てまはし、塗障子等甚だ淸らかにして銀燭燦然として輝き此夜の光景は實に特種の感動を與へたり。

料理は小さく低き膳の上に載せ、之を來客の前に一個づゝ据え純粹の日本風なり。殊に滋養ある食物は刺身にして、歐人は之を醬油に浸して始めて食すべく、又優美なる陶器に盛れる昆布だしの椎茸の吸物、余等に珍らしき蓮根等あり。是に米にて釀せる酒を出す、日本酒は極めて醉ひ易く味甘けれども、嘔氣を催すの恐れありて且頭痛を起し易く、尤も美味なりしは笹の葉に卷ける葛餅なり。

偖舞妓は燦爛たる裝束にて扇を持ちて微妙なる舞をなし、其進退徐々として動作節に適へり。此

宴には一人の貴婦人も連ならず、且談話の小部に限られて一般に及ぶ能はざるは各自席を隔て坐するが故にして、一には又斯の如き席には相互の談話を主とせざるが故なり來客は皆綿を入れたる座蒲團を敷き軟き疊を布ける床に座せり。

皇后宮大夫香川子爵の延遼館に催うせられたる送別會は頗る盛大にして殊に種々なる花を以て見事に裝飾し之に臨席せられたるは北白川宮殿下同妃殿下を初とし、皆宮中の人々なり。宮内大臣土方子爵は　陛下の命を奉じて余に瑞寶章及金四千圓の餞別を下賜せられ、荆妻は　皇后陛下より日本古來の女官服、檜扇及美麗なる黑漆書架を賜はれり。

偖此檜扇に就て記すべき事は宮中に於ては　皇后陛下より之を下賜せられし女官のみ之を携ふることを許さるゝものなるが故、之を賜はるは御寵愛の一方ならざるを證するなり。扇子は素木(しらき)にして作り極彩色を以て花鳥蝶等を畫き且之に長き美麗なる平紬を纏ふ。

此時日本の風習により知人より贈與せられたる餞別品は山の如く、北白川宮殿下は見事なるキヨソネ意匠の花瓶を賜はり鍋島侯は其舊領肥前にて燒ける定紋附の陶器花瓶を、女官室町典侍よりは青銅製花瓶を、長崎式部官よりは薩摩燒花瓶を、總理大臣黑田伯及同夫人よりは古器蒔繪箱を贈與せられ、又余が深き交誼を辱ふせる大膳太夫岩倉公よりも同じく蒔繪箱を贈られたり。余がセントペテルスブルヒ以來の知己なる花房伏見宮別當よりも四角なる一種趣味ある形の銀製の茶器を贈られしが、こは今以て余が知己中の技術通を羨ましむる品なり。

外交家連よりも亦深切なる招待を受けしが、その宴會毎に同情に富める墺地利公使ビーゲレーベン男に邂逅せり。男爵は新任の公使にして三月十日始めて就任の拜謁を賜はり、又永く歸國中なりしホルレーベン氏も男爵と同時に拜謁を賜はれり。三月二十六日　兩陛下に拜謁仰付けられ御暇乞を言上しぬ。

余が妻は同日内廷にて饗宴を賜はり其後小兒等も　皇后陛下に御暇乞申上ぐる樣仰付けられたり。

皇帝陛下は不肖の微勳を嘉賞せられ、且つ皇室より歐洲に御用ある場合には余等に仰付けらるべしとの御諚を傳へられ、妻も亦能く盡瘁せるの故を以て　皇后陛下より賞詞を賜はり、余等兩人は兩陛下の御恩惠に對して敬謝の意を申上げたり。

皇后陛下への拜謁は妻一人にて仰付けられ、長時間有難き御言葉を賜はり、名殘を惜まるゝ御樣拜するも畏れ多かりきと、　陛下は御腕を飾らせられたる金剛石入腕輪を取らせられ妻に下し賜はりたり。又送別の賜宴には、小松宮、北白川宮兩妃殿下にも臨ませられたりと、小兒等の御暇乞申し上げたる折、御慈悲深き　皇后陛下には御感に迫らせられけむ、恐れ多くも御袖を濕ほさせ賜ひ日本風の美しき玩弄品を御下賜相成りたり。

二十八日宮内大臣は余の爲芝離宮に午餐會を開かれ、侍從長を始め宮内官悉く會合し五十九名の多きに上りたり。宮中の音樂は余に最後の別を告げ、太陽は海上、地面を照し硝子窓外を眺むれば、滿庭春色に輝けり、饗應後藤波主馬頭の案内にて新築の厩を參觀せしに、其飼養法は歐風と日本風との折中なり。歐風の制服を着し若くは日本風の衣服を着せる調馬師等は余等の面前にて之を乘り試み、或は駿馬を引出し示せるが、日本馬は彼の日本畫にて見る如く其鼻を水平に上げ居たり。又其形體は亞米利加種（布哇）と佛蘭西種（東京）等種々混ずるを以て皆一樣ならざれども中には甚だ見事なる良馬あり、殊に余は未だ曾て日本の乘馬學校を見ざりし故此見物は實に珍らしく愉快に感じたり。余は又各國務大臣を訪問して告別の挨拶をなししに、總理大臣黑田伯は話次急進黨の後藤氏の入閣を說明して、後藤氏は或は過激黨を煽動し警察の手を煩はし延いて國家の擾亂を來すの恐あらんと思ひたり。故に彼を入閣せしめて其暴動に出でざらしめんことを謀れるなりと。

歸國

余等は三月二十九日鎌倉への途次、横濱に立寄りしに、總領事ドクトル、シユミツトーレグ氏は盛大なる送別會を催ふせり。余等はこれより汽船の出帆まで數日間鎌倉に休養せり。

主馬頭藤波子爵は大命を奉じ書記及通譯山田氏を率ひて同月末日再び余を訪問せられ、宮内省及宮廷の改善に必要なる意見を徵せられ、且事情の許す限り宮内省の組織を改革せんとする由を告げたり。子爵は生涯宮中に奉仕し、當時私人の情實によりて進捗せざる改革を斷行せむとの決心を抱けりと、余は此親愛なる紳士と數時間會談の後余が恭順を　陛下に傳奏せられむ事を托して袖を分てり。

其他ビゴット氏夫妻、キルクウード氏夫妻、サトウ氏（現今カイローに在り）イングレス氏及イングレス孃、フヲン、ホルレーベン氏、總領事シユミツトーレグ氏、フオン、ザンデル氏等の知己鎌倉に訪問せられしが、當時天候善からざりしは甚だ遺憾とする處にして、余等は此等の人々と共に佛陀の巨大なる銅像卽ち大佛の前に立ちて撮影せり。

此際東京にて余が家の裝飾物及圖書等の競賣ありしが、悲しむべし高價なる紀念物も玉石共に一槌の下に碎かれたり（十把一からげの意）殊に圖書の賣却は余の大に遺憾とする所なり。

四月二日鎌倉を發し北獨逸ロイド會社の汽船ゲネラル、ウエルデル號に乘り込まんが爲め横濱に至れり。此日は軍醫ドクトル、クレフエル氏に招かれ小兒等と共に獨逸海軍病院に一日を費せり。病院は高燥なる眺望佳なる處に在りて各室頗る美麗に飾られたり。同日午後は數多の日本人離別の爲め訪問せられ、宮中女官、伊藤、大隈兩夫人、フヘネロサ夫人、ホルレーベーン氏、長崎氏等重なる人にして皆ゲネラル、ウエルデル號まで見送られたり。同夜は總領事の招待ありしを以て再び

汽船を出でゝ氏の家に會食せり。

同三日早朝、又草花、果實等の寄贈を受け船は愈々神戸に向つて解纜せり。

猶小兒等は甲板上に美麗なる四個のステイーマーチエール（汽船用腰掛）を發見せしが是れ青木伯爵夫人が兒等の爲めに備へられたるものなり。

はや陸を去ること既に遠くその影だに見えずなりしが、突然雲の上より白雲を頂ける富士の山頂顯はれ皎々として太陽に輝き、しばしは余等の行を送るものゝ如し。

四日神戸港に到著し汽船は此處に二日間碇泊せるを以て此間を利用して京都へ旅行し有名なる彌阿彌ホテルに投宿せり。然るにナイドハルト畫伯及びサビエハ公の二墺地利人同宿せられ、琉球島よりの歸途なりとのことにて此遠島の模樣及植物の繁茂せる狀況等を物語られたり。余等はサビエハ公と共に京都工藝品展覽會を觀京都の進歩せる貴金屬品、陶器等の土產を購求せり。

舊都の光景は再び余等を恍惚たらしめ、都人の親切鄭重なる擧動飽まで溫和なる春陽の氣候等殆ど去るに忍びざりき。

六日神戸に歸り獨逸總領事クレンキ氏をその莊麗なる邸宅に訪問し、次で再び乘船したり、神戸より長崎に至るの海路は瀨戸內海と稱する海灣にして本洲の沿岸には無數の島嶼ありて森林繁茂し其景色恰も一幅の繪の如く、漸く此域を脫して長崎港に至るを得るなり、海路の南方には樹木の繁茂愈々盛にして殊に常盤木最も優勢を占む、下の關の如き都市は海路至る所にありて、蒸汽船帆船等の夥しく集合せるを見る、瀨戸內海は繪畫の如き光景を有すれども人をして寂寞なる感を起さしむ、然るに長崎に達する時は大に人意を强ふするものあるなり。同港は高山を以て圍まれる繁盛裝大なる港なり。

此航海中有名なる小島の附近を通過したるが、一千六百三十八年（寬永十五年）クリスト教禁止の際此島の絕壁よりカトリツク教を奉ぜる土民數千人を海中に投じたりとか、又傳ふる所によれば此事件にエズイーデンに快からざりし和蘭人の幇助したるものなりと、要するにこは全く訛傳にして往時日本のクリスト教徒は十字架を足にて踏まん事を强迫せられ若し之を拒否する時は死罰に處せられたるものなり。

獨逸領事ミユラーベーク氏は橫濱以來の友人にして、故總領事ツアツペ氏の副官及書記官を勤め、日本の事情に通じ豐富の經驗を有する人なり氏の邸宅は高燥の地にあり、その眺望絕佳にして港灣に集ふ各國の軍艦商船等一望の中にあり、氏の案內により有名なる出島に遊びしが、此島は數百年來和蘭人の居住地となりて彼等は此處にて日本人及其他の國と貿易を營みし島嶼なり。

此時代の景況はアレキサンダー男爵及ヘンリーフホン、シーボルト氏が千八百九十七年（明治三十年）に發刊せる、其父博物學者、醫學者として有名なるフランツ、フホン、シーボルト氏の著書

に詳に記述したり。余は此序を以て喜んで右の有益にして價値ある著書を世に紹介せんとす。

長崎を出帆せる以來海波荒く漸く香港に着し同十四日ロイド汽船プロイセン號に乘じ新嘉坡崑崙坊、亞典等を過ぎゲヌアに到着せり。

オルデンブルヒ大公爵夫妻（夫人は其後間もなく薨去せらる）は友人と共に印度に旅行をなせしが、崑崙坊に於てプロイセン號に乘じたり。大公爵は亞典に於ては英國殖民廳より埃及到着後はイスメリヤに於て獨逸總領事フォン、ブラウエル氏よりポートセットに於てはブロム領事よりの接待を受けられたり。

運河にて二隻の獨逸軍艦に遭遇せしが、オルデンブルヒ大公爵に對して忠順なる敬禮を表したる時は一種言ふべからざる壯觀を呈せり。音樂隊はワハト、アム、ライン（樂曲名）を吹奏し水兵は悉く帆架に整列し軍艦旗は貴族に對する禮を以て引下されぬ。

斯の如き鄕國的の感想を以て極東に於ける滯在は終を告げぬ。極東の滯在は誠に短日月なりしと雖も而もこゝに得たる印象、經驗等は長き生涯に稗益する處誠に大なり。

秘書類纂　帝室制度資料　終

秘書類纂　帝室制度資料　下卷

人名索引

（イ、ヰ）

懿德天皇　二、一
岩村通俊　二〇三、二〇四、二〇五、二〇九
石野基佑　二八六、三二九
石山基正　二八七
今城定德　二八九、三三一
入江爲守　二八九、三三一
石井行昌　二九〇、三三三
池尻基房　二九〇、三三三
今園國映　二九一、三三三
一條忠貞　二九四
今城定章　三〇二
石野基安　三〇三
石山基文　三〇三、三二九
入江爲福　三〇四
池尻知丸　三〇九
岩倉具慶　三一〇
石井行知　三一五
岩倉具經　三一八
岩倉具明　三三四
岩倉具德　三三六
飯田左馬　三七六
池田幸　三七九
イレネ　二八六
伊藤博文　三八九、四〇二、四〇三、四〇四、四〇五、四一五、四一七、四三四、四三七、四四二、四四四、四五〇、四五四、四八六、四八八、四八九、四九五、四九九、五〇二、五〇九、五二一、五三七、五三八、五五七、五八九、六〇三
インゲレス　三九五、五三五、六〇三
イルグネル　三九六、五五七、五九五
岩倉具視　四三二、四三三、五一八
井上馨　四九五
伊東己代治　五五七
イルビン　五八七

《ロ》

ロームベルク　二二〇
六角　博通　二八六、三〇三、三二九
六條　有熙　二八八、三三一
六條　有容　三二〇
ロバルトモール　三八九
ロペルト、フヲン、モール　四三九
ローレンス、フヲン、シユタイン　五〇九、五一一
ローベルト、フヲン、ヘルムホルツ　五七六
ロツトゲトルフ　五八三

《ハ》

ハインリヒ　二二三、二二七、二三〇、二八五
葉室　長邦　二八四、三二七
橋本　實顯　二八五、三二八
萩原　員光　二八五、三二四、三二八
長谷　信篤　二八五、三二四、三二八
八條　隆邦　二九〇、三三三
花園　公季　二九〇、三三三
花園　實延　二九八
橋本　實麗　二九八
葉室　長順　三〇七
八條　隆吉　三二一
橋口　壯助　三七六
橋口　傳藏　三七六
伴　林六郎　三七六
ハンス　三八六
ハウスクネヒト　三九四、五八一
ハンニー　四〇六
ハツバアド　四五一
明宮　四五三、四八八、四九〇、五二六
バルディ　四九五、五三五
花房宮内官　五三五、六〇〇
ハノーヴアージヨージ　五六九

《ニ》

二條　基弘　二七六
西三條公允　二八三、三二六、三三八
庭田　重直　二八五、三二七
西四辻公業　二八七、三三〇
西大路隆脩　二八八、三三一
錦織　教久　二八八、三三一
西洞院信愛　二八七、三三一
西洞院信堅　三一四
錦大路益子　二九一、三二八、三三四
西五辻文仲　二九一、三二八、三三四
二條　齊敬　二九三
西四辻公恪　三〇〇
庭田　重胤　三二一、三三九
綿織　久隆　三一七
錦小路俊昌　三一七
西大路隆意　三二一
西高辻信嚴　三三五
西田直五郎　三七六
丹羽出雲守　三七六
仁孝　天皇　四六八
ニキツシユ、ローゼネツグ　五三三

《ホ》

坊城　大尉　二二〇、二二六
ボリユー　二六九
坊城　俊章　二八四、三二七
堀河　康隆　二八六、三二九
穗波經藤　二八八、三三二
穗樸　俊香　二九二、三三五
坊城　俊政　三〇八
穗波經度　三〇九
堀河　親賀　三二三
坊城　俊延　三三五
ボルセーズ　三七一
保田　信解　三七八
本田小太郎　三七八
ホルレーベン　三八四、三九〇、三九六、四〇二、四四一、四四二、四五一、四八六、四九二、四九九、五〇七、五一一、五一四、五二二、五三七、五九八、六〇一、六〇三
ホイグト　三八八
ホエーン　三九四
ボアソナード　三九五、四五四
ポツト　四〇二
ホーヘンロー　四三三
北齋　四七九
ボツヘ　五六三、五六四

《ヘ》
ヘッセン　三八二、四四一、四四二
ヘルバルト、ビスマーク　三八五、三八六、五三四
ベルヒヱム　三八五
ヘードウツヒ　三八六
ベルタ、フレータル　三八六
ヘルムート　三九〇
ベルツ　三九二、四八六、五八一
ヘンリー、シーボルト　三九四、五五二、五五八、六〇五
ヘルマン、ロエスレル　三六一、三九五
ベルタン　三九五
ヘルマン、シユルツヱ　四三七、五三八
ベルンハルト　四九二、五三四、五五二
ヘンリー、フオン、オルレヤン　四九二、五五三、五五四
ペンポンヒヱル　五二八
ベーメル　五二九、五五二
ベルチイン　五七三
《ト》
徳川家　二三八、四一〇、四一三、四二八、四三一、四七一、五〇二、五三一、五四一、五四四、五四七、五四九
徳大寺實則　二八二、三三五、四三二、五一三
富小路敬直　二八六、三一〇、三二九
外山光庸　二九〇、三三三
豐岡道雄　二九一
徳大寺公純　二九五
外山光輔　三〇六
豐岡隨資　三〇六
豐岡健資　三一〇
徳川廣忠　三五六
徳川家康　三五八、三九七、四二三、四四七、四七七、四八〇、四八二、五四〇、五四一、五四二、五四四、五四八
徳川秀忠　三五八、四一一、五四〇
徳川家光　三五八、五四一、五四七、五四八
徳川家綱　三五八
徳川綱吉　三五八
徳川家宣　三五八
徳川家繼　三五八
徳川吉宗　三五八
徳川家重　三五八
徳川家治　三五八
徳川家齊　三五八
徳川家慶　三五八
徳川家定　三五八
徳川家茂　三五八
豐田謙次　三七八
富田織部　三七九
ドルンベルク　四〇六
徳川慶喜　四二八、四三一、四四一、四五七、四八二、四四四、四五四、五六三
トウレンチ　五〇三
戸田氏共　五三四
トスカナ　五六三、五八三
ドッズ
《チ》
千種有任　二八六、三一〇、三三〇
チーツヱ　五八一
《リ》
リユシヤン　二六九
《ル》
ルイゼハンメル　三六六
ルードルフ　三九四、四九四、五九〇
ルレロ　五一三
ルードヰヒ、ヰルヘルム　五三八
《オ》
大國主大神　一、二
大伴連　三、
大山津見神　二、
大原從二位　二七三
大炊御門幾麿　二八三、三三六
正親町實正　二八四、三三七
大原重朝　二八四、三三七
押小路公亮　二八七、三三〇
大宮以季　二八八、二五九、三三二
岡崎鷹麿　二九〇、三三三
小倉英麿　二九〇、三三三
大炊御門家信　二九五
正親町實德　二九六
小倉輔季　二九七
押小路實潔　三〇八

岡崎國有　三〇九
大原重徳　三一三
押小路師行　三三六
正親町季董　三三六
オキシッ　三六一
大橋順藏　三七七
大久保要　三七七
オットマール、フォン、モール　三六二、三八〇
オルデンブルグ　三八五
オットー、デーンホーフ　三九二、五一四
大山巖　四〇〇、四〇一、四三三
大隈重信　五三五、五七四、五七五、五八六、五八七、六〇三
オッペンハイム　五六三
オルデンブルヒ　六〇六

《ワ》

鷲尾隆聚　二八四、三二〇、三二六
若王子遠文　三二〇、三二四
鷲尾隆順　三三六
渡邊内藏太　三七四
渡邊登　三七四
ワンダ　三八五
ワルデマル　三八六
ワイブレヒト　三九四
ワルデマール　五五四
ワグネル　五五五

《カ》

閑院宮　一七八、一七九
華頂宮　一七八、一八〇
香川志保　三二〇、三三六
花山院忠遠　二八三、三三六
甘露寺義長　二八四、三〇七、三二七、三三九
勸修寺顯允　二八四、三〇七、三二七、三三九
烏丸光享　二八五、三二七
交野時萬　二八六、三二五、三二九
勘解油小路資生　二八七、三〇六、三三〇
風早公純　二八七、二九九、三三〇
河鰭實文　二八七、二九八、三三〇
唐橋在正　二八八、三三一
梶野行篤　二九一、三一九、三三五
河邊隆次　二九三、三三五
花山院家威　二九五
烏丸光德　三〇五
唐橋在光　三一三
河邊博長　三三六
茅根伊豫之介　三七三
金子孫二郎　三七四
勝野豐作　三七五
河上彌市　三七五
河瀨太宰　三七六
河合惣兵衛　三七七
海賀宮内　三七八
カール、アレキサンドル　四〇五
香川景藏　四二五、四二六、四三三、四四四、五二一、五六八、六〇〇
桂太郎　五二〇、五二五
カルトンス　五五四
カンプベル　五八三

《キ》

吉田良正　二九〇、三三三
吉田良藏　三二六
由丸稻之衞門　三七五
吉田稔麿　三七五
吉田大八　三七八
吉井宮内次官　四〇一、四二五、五五一
美子　四二六、四二七
賴仁王　四四七
義經　四五六

《タ》

田中光顯　一九七
立見中佐　二二〇、二三六
鷹司熙通　二七六
醍醐忠順　二八二、二九六、三二五、三三八
高丘紀季　二八六、三〇一、三二九
高辻修長　二八六、三二三、三二九
竹屋光昭　二八七、三三〇
高松實村　二八八、三三一
竹内惟忠　二八八、三三一
高倉永則　二八九、三二二、三三三
高野宗順　二九〇、三三三
竹園康長　二九一、三三六

鷹司輔熙　二九四
高松保實　三〇〇
高野保健　三〇三
竹屋光有　三〇五
竹内治則　三一三
玉松眞弘　三一八
垂水瀨經家　三三一
玉松眞幸　三三五
橘諸兄　三五五
橘清友　三五六
橘正成　三五九
竹内式部　三七三
武田伊賀守　三七三
高橋多一郎　三七四
竹内正兵衞　三七四
田中謙助　三七六
多田彌太郎　三七七
高橋作也　三七八
高崎式部次官　四一五、五二五、五三八
高倉伯　四三三
ダヴイツドフ　四四三
高倉天皇　四七三
高倉典侍　五二一、五七四、五八五
ダイベル　五八三

《レ》

冷泉爲紀　二六四、三二七
冷泉爲柔　二六八、三〇四、三三一
冷泉爲理　三〇四
冷泉爲紀　四六五、四六八
レオポルド、フヘルヂナンド　五三四、五五八

《ソ》

園基祥　二八三、三〇三、三二六、三三九
園池公靜　二八六、三〇〇、三二九
ソフキー　四〇五

《ツ》

堤功長　二六七、三〇九、三三〇
土御門晴榮　二八九、三三三
土御門晴雄　三二六
鶴殿忠善　三三六
津崎村岡　三七九
ツアツペ　三九一、四九二、五三二、五三三
ツアンダル　四〇六、五三四

《ネ》

ネット　四〇二

《ナ》

梨本宮　一七八、一八〇
中御門經明　二八二、三二五
中山孝麿　二八三、三二五
中院通規　二八四、三二七
中園實受　二八七、三〇〇、三三〇
中川興長　二九一、三三四
中院通富　二九六
中山忠能　三〇一
難波宗禮　三〇一
中御門經之　三〇八
難波宗美　二八九、三三三
中御門經隆　三三五
拿破列翁　三六八、三六九、三七〇、三七一、三七二、三九五、四五〇、五五四
中村九郎　三七四
楢崎彌八郎　三七四
中島源藏　三七七
中村團太　三七七
長尾都三郎　三七八
長崎省吾　三八九、三九〇、四〇二、四一四、四一六、四三七、四五五、四八二、五二一、五三五、五三六、五五一、五七六、五八四、六〇〇、六〇三
鍋島閑叟　四一五、四四一、五〇三、五〇八、五二一、五二五、五三一、五三七、五三八、六〇〇
ナイト　五八三
ナイドハルド　六〇四

《ラ》

賴久太郎　三七四
ラートゲン、デルブリユツクス　三九四、五八一
ラブリー　五八三

《ム》

室町公夫　二八五
武者小路公共　二九〇、三三三

室町公賀　二九七
武者小路公季　二九九
室町公大　三二八
村井修理少進　三七八
紫式部　四七五
室町典侍　五一一
ムテジウス　五八一

《ウ》

ウキルヘルム　三二八
梅溪通善　二八五、三一一
梅園實紀　二八五、三二九
裏松良光　二八七
植松雅平　二八八、三三一
梅小路定行　二八九、三三一
裏辻彦六郎　二九〇、三三三
太秦供康　二九二、三三五
裏辻公愛　二九八
梅園實好　二九九
裏松恭光　三〇六
梅小路榮丸　三〇九
植松雅言　三一二
梅溪通喜　三二八
裏松良光　三三一
鵜飼吉左衛門　三七五
鵜飼幸吉　三七五
浦野望東尼　三七九
ウキルヘルム第一世　三八五、三九六、四九二、四九七、五二五、五二七、五二八、五五四、五五五
雲慶　四七二
ウキルウルム第二世　四九四、五五五、五九〇
ウートレーメー　四九二、五三六
ウキルデンブルック　五三七

《ノ》

野宮定穀　二八九、三三一
野宮定功　三〇一
野村新太郎　三七九

《ク》

久邇宮　一七八、一七九
クルテーラペイラ　二六九
九條道孝　二七六、二九三
久我通久　二八二、三二五
倉橋泰顯　二八六、三二九
桑原輔長　二八八、三二四、三三一
久世通章　二八八、三三一
栗田口定孝　二九二、三二四
櫛笥隆督　二九〇、三三三
久我建通　二九四
久世通熙　三一〇
倉橋泰聰　三一六
櫛笥隆韶　三二〇
來原良藏　三七五
グローベン　三八五
クレツフエル　三九一、五三三、六〇三
グラスマン　三九四
グルートシユライベル　三九五
九條道孝　四三二
黑田長成　四九五、五三八、五五〇、五五一、五五七、五八九、五九六、六〇〇、六〇三
クレエル　五五五
クライトネル　五五八
クレンキ　六〇四

《ヤ》

山階宮　一七八、一七九
山科言綱　二八三、三二〇、三二六、三三八
柳原前光　二八三、三二六
山本實庸　二八八、三三一
山井兼文　二八九、三三三
藪篤麿　二九〇、三三一
山本實政　二九九
藪實方　三〇〇
柳原光愛　三〇五
山井氏暉　三二二
山縣大貳　三七三
山本四郎　三七六
山國兵部　三七三
山田亦助　三七四
大和團之助　三七四
ヤスムンド　四一三、五三三
山口主獵局長　四二五、五〇九、五一〇、五一八、五五一、五七〇
山縣有朋　四七七

《マ》

萬里小路通房　二八四、三二七
松本宗隆　二八五、三二八、三三九
町尻量衡　二八六、三二九
松林爲美　二九二、三三五
松園尙嘉　二九二、三三四
松木宗有　三〇三
萬里小路博房　三〇七
松寄萬長　三一七、三三五
町尻量輔　三二一
萬里小路正秀　三三六
松平大炊頭　三七三
松島剛藏　三七四
松本謙三郎　三七七
間崎誓馬　三七七
松田重助　三七七
松林康之助　三七七
マヱット　三九四
マルテイノ　四〇三、五五三
マロルテイ　四三七

前田利嗣　五八〇、五八一

《ケ》

繼體天皇　三

《フ》

藤原安宿媛　二、二一、三〇
伏見宮　一七七、一七九、三二一、三三二、三三三、四一七、五七四
ブルケネー　二六九
伏原宣足　二八七、三三〇
藤井行德　二八八、三二八
舟橋遂賢　二八九、三三三
藤谷爲寬　二八九、三三三
藤大路納親　二九二、三三四
藤枝雅之　二九二、三三五
藤谷爲遂　三〇四
伏原宣諭　三一五
藤波教忠　三一六
舟橋康賢　三一五
藤井行道　三一七
藤原鎌足　三五五
藤原永平　三五五
藤原不比等　二〇、三五五
藤原宇合　三五五
藤原眞楯　三五五
藤原種繼　三五五
藤原良繼　三五五
藤原園人　三五五
藤原百川　三五五
藤原冬嗣　三五五
藤原良相　三五六
藤原良房　三五六
藤原長良　三五六
藤原基經　三五六
藤原高藤　三五六
藤原時平　三五六
藤原定方　三五六
藤原忠平　三五六
藤原師輔　三五六
藤原師尹　三五七
藤原尹尹　三五七
藤原實賴　三五七
藤原兼道　三五七
藤原賴忠　三五七
藤原爲光　三五七
藤原道兼　三五七
藤原公季　三五七
藤原能信　三五七
藤原教通　三五七
藤原實季　三五七
藤原長實　三五七
藤原基實　三五七
藤原賴長　三五八
藤井右門　三七三
藤田次郎左衞門　三七三
藤田小四郎　三七五
藤森恭助　三七七
藤本津之助　三七七
古高俊太郎　三七八
フムベルト　三八四
フリードリーカール　三八五
フヲン、ツアンダー　三九〇

フヨン、ブラント　三九二
フヨン、アイゼンデツヒエル　三九二、四〇一
フヨン、ジヤスムンド　三九四
フヨン、ブランケンブルグ　三九五、五五五、五八四
フヨン、ウイルデンブルツク　三九五、五九五
プルンケツト　四〇三、四四四、四五四
フレンス　四〇七
藤波言忠　四二五、五二五、六〇二
フリードリツヒ、ウイルヘルム　四四一、四九二、五二八、五三〇
ブールガレル　五三五、五三五、五三七
フリードリツヒ、レオポルド　五三二、五五八
フツクス、ノルドホツフ　五三四、五三五、五三九、五五三
フリードリツヒ三世　五五四
フホイグト　五八一
フオン、ザンデル　六〇三
フヘネロサ　六〇三
フランツ、フオン、シーボルト　六〇五
フオン、ブラウエル　六〇六
ブロム　六〇六

《コ》

事代主命　一、二、三〇
木花之佐久夜媛　二一
小松宮依仁王　一七七、一七八、二一八、二二〇、二二二、二二三、二二六、二三七、二三二、二三三、二三五、二四〇、二五七、二五八、二六八、二七〇、二七二、四九二、五二〇、五二五、五二九、五七四、五九八、六〇一
小松原代理公使　二二〇
近衛篤麿　二七五
五條爲榮　二八六、二二五、二二九
五辻安仲　二八六、二二九
小松行正　二九一、二二六
近衛忠熙　二九三
五辻高仲　二二二
小松行敏　二二九
是枝柳右衛門　二二六
コデイフヒカートル　二九五
コーテス　四五五
孝明天皇　四二〇、四二八
孝謙天皇　四六二
後水尾天皇　五四三
弘法大師　五四四
後藤象二郎　六〇二

《エ》

惠美押勝　二五五
エリザベツト　二八五
エンデ　二八八、五八一
エス、フヨン、シーボルト　二九一
エリベツトフオンラード　二九二
エツゲルト　二九四

《テ》

手白香皇女　二
デニテツト　二七一
弟子丸龍助　二七六
デウエツテ　四四二、四五二、五九六
天武天皇　四七四
天智天皇　四七四
デルンブルヒ　四九一、五二四、五二五、五二九、五三九、五五二、五五五、五七七、五七八、五九〇、五九八

《ア》

安寧天皇　二、二
天豐津媛命　二、二
天津日高日子番能邇々藝能命　二
有栖川宮　一七七、一七九、二七六、四一七、四二六、四九四、五〇七、五二九、五七四、五八〇、五九七
姉小路隆晃　二二〇、二二一、二二六、二二七、二八五
青木周藏　二六九、二七〇、二八四、二九二、二九四、四〇二、四〇六、四四二、五二五、五二五、六〇四
飛鳥井雅望　二八二、二二六、二二八
油小路隆晃　二八二、二二〇、二二六、二二八
姉小路公義　二八四、二二六、二二九
綾小路有長　二八七、二二二、二二〇
愛宕通則　二八九、二二二
阿野季忠　二九〇、二二三
阿野公誠　二九八
飛鳥雅典　二〇一
愛宕通祐　二二一
鮎澤伊太夫　二七五
有馬新七　二七五
有吉熊次郎　二七七
アレキサンダー、ミヒエロウイツチ　二八二、四五〇、五五八

アウゴスタ　三八五、三八六、四二七、五二八
アレキサンダーシーボルト　三九四、四一三、四四七、四五四、五二四、六〇五
昭宮　四二八、四八六、四九三、五七七、五七九
足利尊氏　四五六
足利義滿　四七二
アルドルフ、シユテツヒミユーラー　五八一

《サ》

三宮　二二〇、二三一、二三六、二三七、五三一、五三五、五八四、五九八、五九九
西郷從道　二三〇、二三六、二八六、四三三
西園寺公望　二八二、二九四、三二五、三三八、五〇二、五二八
嵯峨公勝　二八三、三三五
澤宣量　二八四、三三五
櫻井義功　二九〇、三三四
相樂綱　二九二、三三六
三條實美　二九四、三二七、四二三、四三二、四四九
三條西公充　二九六
嵯峨實愛　二九六
澤爲量　三一五
櫻井供茂　三三
ザルウエー　三六一
佐久間佐兵衞　三七四
櫻任藏　三七五
齋藤留次郎　三七五
サデイカルノー　五三五
ザール　五八一
サルモン　五八三
サトー　六〇三
サビエハ　六〇四

《キ》

北白川宮　一七七、一七九、四〇〇、四一七、四一八、四四一、五四一、五七四、六〇〇、六〇一
菊亭修季　二八三、三三五
北小路隨光　二八六、三〇六、三二九
清岡長說　二八六、三二九
北小路俊親　二八八、三二九、三三三
北大路公久　二九二、三三五
北河原公平　二九三
菊亭脩季　二九五、三三八
清岡長熙　三二四
北小路俊昌　三二七
北畠通城　三二八
清棲家教　三三七、三三七
北河原公憲　三三四
北小路梅丸　三三六
北畠克通　三三六
北島女官　四一六、四三三、五〇四、五八五
キルクウード　五二五、六〇三
キヨソネ　五二九、五五五、五八二、六〇〇
ギール　五七四

《メ》

目時隆之進　三七八
メツケル　三九五、四九二、五三一、五三二

《ミ》

壬生基修　二八四、三〇三、三二八
三室戸雄光　二八五、三二八
水無瀨忠輔　二八九、三三二
南岩倉具威　二九一、三三六
南光利　二九二、三三六
水谷川忠起　二九二、三三四
三室戸陳光　三〇六
南岩倉具義　三二八
壬生輔世　三二九
壬生桄夫　三三五
源常信　三五六
源融　三五六
源能有　三五六
源光雅信　三五七
源通宗　三五八
源義貞　三五九
美玉三平　三七六
三好監物　三七八
妙圓寺月性　三七九
ミユルレル　三九二
ミラ、デーンホーフ　三九二、五一四
ミヒヤエリス、デルブリユツクス　三九四
ミユラ、ベーラ　五三四、五七八、六〇五

ミユンステル　五五七

《シ》

四條隆謌　二八二、三三〇、三三六、三三八
滋野井公壽　二八四、三三六
清水谷實莫　二八五、三三八
慈光寺有仲　二八五、三三二、三三八
白川資訓　二八六、三三二、三三九
七條信義　二八九、三三三
持明院基哲　二八九、三三三
芝山祐豐　二九〇、三三三
芝小路豐俊　二九二、三三六
芝亭愛古　二九二、三三六
鹿園實博　二九二、三三五
滋野井實在　二九七
清水谷公正　二九七
持明院基靜　三〇三
芝山慶豐　三〇八
七條信祖　三三一
清水清太郎　三七四
柴山愛次郎　三七五
成就院忍向　三七九
聖護院宮　三七六
シユミツト、ツアジロー　三八六
ジヤストムンド　三八九
シユリツペンバツハ　三九二
シヤウイツチ　四〇三、五一九、五五六、五七四、五七五、五八五、五九七
シヤンキウイツ　四〇三、四九三、五七一、五七二、五八七
シユライニツク　四四三
神功皇后　四五五
聖德太子　四五七、四六二
聖武天皇　二一、二〇、二三、四六一
シエリング　五〇七、五三四、五五五、五八三
シユタイン　五〇九、五二一、五二八
ジヤウドン　五二一
神武天皇　二、六、一一、一二、一五、二〇、二二、二四、七九、八〇、八一、八二、八四、八五、一四一、一四二、一四三、五三六、五八九
シユミーデル　五五五
シユミツトーレダ　五六八、五八三、六〇三
シユミツト　五八三

《ヒ》

媛蹈鞴五十鈴媛命　二、一
土方允元　一九七、二七六、四九五、五一三、五三二、五二五、五三一、五七五、五八四、五九六
廣幡忠禮　二八二、二九五、三二五、三三八
東久世通禧　二八三、三一一、三二六、三三九
廣橋賢光　二八四、三二七
日野資秀　二八四、三二七
平松時厚　二八七、三三〇
東園基愛　二八七、三三〇
日野西光善　二八八、三〇五、三三一
樋口誠康　二八九、三三一
東坊城德長　二八九、三三一
東園基敬　三〇二
日野資宗　三〇四
廣橋胤保　三〇五
東坊城任長　三一三
平松時言　三一四
東三條實敏　三三六
ビヨーツル　三六〇
平井收二郎　三七七
弘瀨健太　三七七
廣田精一　三七八
ヒンツペークル　四五三
秀吉　四五七
ピゴツト　五三五、五五七、六〇三
ビグトリヤ　五五三
ビーゲレーベン　六〇一

《モ》

毛利登人　三七四
森山新藏　三七六
森山新五左衞門　三七六
森喜右衞門　三七八
モツセ　三九四、五一五
毛利公次　四四〇
毛利慶親　五〇一
モール夫人　五一一
守澄親王　五四一
森有禮　五九三、五九五

《セ》
清閑寺經房　二八五
清閑寺豐房　三〇八
清閑寺盛房　三二七
關　鐵之介　三七五

《ス》
綏靖　天皇　二、一一
素戔嗚尊　一〇
ステイフェンソン　二三三
杉溪　言長　二九二、三三五
菅原　道眞　三五七
杉山　松助　三七五
スウドマン　三八六
ステグミュルラル　三八八、五八二
スクリバ　三九二、五八一
スピンネル　四〇五、四〇六、五二九、五九〇
杉　孫七郎　四三〇
ステイルフリード　四三七
推古　天皇　四六二

昭和十一年六月廿二日　印刷
昭和十一年六月廿六日　發行

帝室制度資料・下卷

（非賣品）

校訂者　平塚篤
發行者　東京市杉並區西荻窪二丁目六十六番地　平塚篤
印刷者　東京市本所區厩橋一丁目廿七番地　凸版印刷株式會社本所分工場　河合勝夫

發行所　東京市麴町區内幸町大阪ビル内　秘書類纂刊行會
電話銀座（57）五一八一番
振替東京三一六六四番

不許複製

LI10J-44